

令和4年度「全国学力・学習状況調査」の結果 —分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

区 名	東住吉区
学 校 名	大阪市立矢田西小学校
学校長名	宮川 潤一

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和4年4月19日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

大阪市教育局では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育局の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問紙調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・学校では、第6学年 38名

令和4年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語科・算数科・理科とも、平均正答率は大阪市、全国平均より下回っている。平均無答率についても昨年度は大阪市、全国平均より少なかったが、今年度は理科のみにとどまった。とくに国語科については5ポイント以上の開きがあった。領域別の平均正答率では、国語科は「(3)我が国の言語文化に関する事項」のみ6ポイント強上回ったが、それ以外は大阪市、全国平均を下回った。ただし「読むこと」については昨年度、大阪市平均より15ポイント以上の開きがあったが、今年度は8ポイント程度にとどまった。算数科についてもすべての領域で大阪市、全国平均を下回ったが「変化と関係」については大阪市、全国平均との差が一番小さく、2ポイント以内に収まっている。理科についてもすべての領域で大阪市、全国平均を下回った。

質問紙は、人権感覚、自己有用感の項目は、肯定的な回答は大阪市、全国平均並み、もしくは上回る回答を得たが、自己肯定感、主体的・対話的な学びの項目については、大阪市、全国平均を下回っている。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕ここ数年は、平均無答解答率は、対全国差が小さくなってきていたが、今年度については開きの大きい領域が見られた。年々、粘り強く問題解決に取り組む姿勢が身についてきており、自分で考えて記述するような設問や選択式の設問の無答は少ないが、国語科の漢字を書く設問や、算数科の立式や割合を分数で表す設問など、既習事項を解答するような設問の無答率が高く、基礎的な既習事項の定着が弱いことがうかがえる結果となった。また「書くこと」「読むこと」などの記述式の問題の正答率についても、ここ数年改善されつつはあるものの大阪市・全国平均と比べるとまだまだ低く、児童質問紙の解答からも児童自身の苦手意識がうかがえる。

〔算数〕大阪市・全国平均からは10P以上下回ったが、「変化と関係」については2ポイント以内にとどまっている。反対に「図形」「データの活用」については15ポイント前後、正答率が低く、図形を構成する要素や目的に応じたデータに着目し、必要な情報を読み取ることが苦手と考えられる。児童質問紙の「算数の勉強は好きですか」「算数の授業の内容はよく分かりますか」の回答結果が大阪市・全国平均と肯定的な回答に大きな違いがみられないことから学習への意欲や自信と、学習の成果に差異が見られる。

〔理科〕大阪市平均との差異はすべての領域で10ポイント以内だが、大阪市と全国の平均の差異自体に3～4ポイントの開きが見られるため、「生命」を柱とする領域以外は全国平均から10ポイント以上の開きがあった。国語科と同じく「メスシリンダーという器具の名称を書く」設問や、「光が直進することを理解しているうえで解答する」設問など、既習事項の理解・定着が絶対条件になる設問での正答率の開きが顕著だった。自分の考えをもち、それをもとに解答する設問では比較的、正答率の開きは小さかった。

質問紙調査より

「将来の夢や目標を持っていますか」(87.5%)、「人が困っているときは、進んで助けていますか」(96.9%)、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」(100%)、「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」(87.6%)、「学級の友達との話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」(93.7%)、「学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいますか」(84.4%)、の5項目については、大阪市・全国平均と比べて肯定的な回答の割合が特に高かった。また「読書が好きですか」という設問についても、最も肯定的な回答が大阪市・全国平均より10ポイント以上上回っていた。年々、育てたい子ども像に近づきつつあり、子どもたちの学びへの意識も着実に高まってきているが、各教科の調査結果と比較すると、学習の成果に十分結びついていないとはいえない。なお、「自分には、よいところがあると思いますか」の設問に対しては62.5%と、10ポイント以上大阪市・全国平均より低く、今年度の対象学年集団は、自己肯定感が弱いことが明らかになった。今後の指導の必要性を感じる結果となった。

今後の取組(アクションプラン)

本校では、人格の形成が学校教育の大きな目標の一つであり、学力向上に特化した教育にならないようバランス感覚を大切にして取り組みを進めてきた。現状、大きな学力向上まではいたっていないが、年々、粘り強く問題解決に取り組む姿勢が身についてきていると考える。学力向上は1年でできるものではなく、6年間の長いスパンを意識して今後ともこれまで取り組んできた以下の5項目を継続して、取り組みの中心として学力向上に取り組んでいきたいと考える。

- 1 すべての子に確かな学力を身につけるために授業改善を行う。授業をとおして学力向上を図る。
- 2 学力の基礎となる挑む力・やりきる力を育てる。
- 3 互いに学び合い高め合う集団を育てる。
- 4 学力状況の分析を行い、課題を明らかにしてチームで学力向上に取り組む。
- 5 家庭での学習習慣が確立できるようにする。